企業

本能を活かせるようなまちづくりを

雫石町

野澤 日出夫 小岩井農牧株式会社

取材日 2013.06.05

総面積約3,000haの総合生産農場である小岩井農場の特別常任顧問。他にNPO法人環境パートナーシップいわて代表理事、日本ビオトープ協会理事副会長を務める。大震災後、地域やNPO、大学と連携して「緑のカーテンプロジェクトいわて(GCPI)」を発足させ、仮設住宅への支援活動や、被災林再生支援などを行なっている。

3月11日 14時46分

普段通り小岩井農場内の執務室にいた時、強い地震を感じた。非常に長い揺れが2度3度連続した。かなり大きな揺れであったが、明治時代の建物で、かえって強度が強く倒壊などの心配はしなかった。玄関まで出て様子を見ていると、そのうち電気が消えた。地震直後は通話可能だったため、すぐに各地の何人かに電話で連絡を取り、被害状況の把握と確認を行ない、併せて自分の無事を知らせた。

小岩井農場内は大きな被害はなかった。盛岡で1 人暮らしの90歳になる義母が気がかりで、迎え に行き盛岡の自宅へ戻った。蓄電式の信号機が2 基ほど作動していたがその他の信号機は停電で消 え、いたるところの交差点が混乱して渋滞してい た。車の中でラジオを聞き、大津波が押し寄せた 事とその被害を知った。まさか沿岸部があのよう な大災害となるとは思わずにおり、大変な衝撃を 受けた。前々日に起こった大きな地震の津波が 50~60cmだったので、もし津波が来るとして も少し高いくらいで大事には至らないだろう、む しろあの長い大きな揺れによる被害の方が大きい のではとさえ思っていた。自宅は蓄熱式暖房機の ため、寒さから当日は逃れる事ができた。太陽光 パネルが設置してあり、翌日からの電力は確保さ れた。テレビで津波による被害を目の当たりにし、 改めて被害の大きさを認識した。盛岡市内の中心 部で電力が復旧したのは震災翌日の夜であった が、多くは3日間の停電となった。

「助けたい。何かしなければ」

地震による停電は復旧作業を長期化させると感じた。小岩井農場では、イベント開催時にお世話になっている業者から電源車2台を借りることができ、ライフラインが復旧するまでの3日間、乳牛700頭の搾乳や牛乳冷却、養鶏部門の孵化場・施設内空調など緊急の対応が続いた。

沿岸部には知人が多くいたが連絡不能で、ずっと



その人達の事が気がかりだった。地震の直前に「大槌に講演に来ている」との連絡をもらった岩手県立大学の先生とは、地震後すぐに連絡が取れなくなった。共に県の環境審議会を務めており10年以上のお付き合いがある方だ。大槌町での講演の準備をしていた時に大津波に遭い、津波の直撃被害を受けたと思った。その後も連絡がとれず絶望的と思っていた。ところが、地震から3日後の夕刻、先生から電話が入った。「大槌町の避難所を脱出した。遠野まで送ってくれた方がいて、遠野の道の駅から電話が通じた」と言う。先生は危機一髪で津波から逃れたが、この地域でも多くの死者・行方不明者が出た。すぐに迎えに行き大学へ送り届けた。その送り迎えにより、車のガソリンが残り僅かとなって行動が制約される事となっ

被災地に初めて行ったのは、ガソリンが手に入るようになった4月に入ってからで、連絡のつかない沿岸部の知人の安否を確認するために、陸前高田、大船渡、釜石、宮古まで北上して消息を確認した。知人は皆無事であったが、家や家族を流された方がたくさんいた。津波被害のあった地域へ近づくと、あるところから風景が全く変わり、一部の道路だけが通行を確保されていて、瓦礫が両側に積まれていた。道路はやっと車が通れるくらいの幅だ。自衛隊の救出活動の目覚ましい姿が強く印象に残っている。町に入っても自分がどこに

NPO/企業

いるのか分からず、カーナビは瓦礫の先を誘導していた。

「沿岸部の知人達を助けたい。何かしなければ」と思った。支援活動をしている仲間もたくさんいたが、自分が手伝いに行ってもその活動だけになってしまう。むしろそうした活動を支える軍資金確保などが必要だと感じ、直接支援活動へ行く事と葛藤した。

大槌町には、NPO法人遠野まごころネット副理 事長の臼澤良一さんがいた。彼は環境審議会のメ ンバーだったので、彼から被災した話を聞いた。 「何でも言ってほしい。できる事は何でもする」 と言って、大槌町に何度も通い、食料や水を運ん だ。臼澤さんを支援しようと思ったのは、彼が大 槌町小鎚の避難所で取りまとめ役や相談役を引き 受け、広場にテントを張り、寒さの中で活動を続 けていたからだ。彼の健康が危惧されたが、常時 広場に待機している事で必需品の調達や、避難所 の皆さんが何かと相談でき安心できた。彼は見る からにやつれていたが、その頃はできる人がすべ てを背負っていたように思う。彼の行動が、避難 所の運営を混乱なくできたものと敬意を表してい る。非常時にこのようなリーダーやコーディネー ターが必須と感じた。

緑のカーテンプロジェクトいわて (GCPI) 発足

2008年3月11日、JAXA(宇宙航空研究開発機構) の土井隆雄宇宙飛行士は、植物種子と共に「エン デバー号」に乗って、国際宇宙ステーション (ISS) へ向かった。国際宇宙ステーションの日本モ ジュール「きぼう」内に9ヶ月間保存されたアサ ガオの種は日本で発芽後栽培され、採取した2代 目種子3,800粒が2011年、NPO法人自然環境復 元協会へ譲渡され、その会員であった岩手県立大 学平塚明教授に分譲された。この宇宙を旅したア サガオの種から作った「緑のカーテン」を仮設住 宅に設置し、日陰と共に潤いを提供したいという 志によって「緑のカーテンプロジェクトいわて(代 表・野澤)」が生まれた。仮設住宅の建設は全体 的に遅れがちな上、断熱や換気など気候条件に全 く配慮されていない西向きの建物は強い日差しで 室内の壁も異常に暑くなる状況であった。そこに 少しでも潤いを提供したかった。岩手県立大学総 合政策学部の平塚明教授が中心となって学生達が 苗を作り、私が仮設住宅との調整を行なった。仮 設住宅工事の進捗に合わせて2011年7月、現地 のグループや住民・ボランティアセンターの協力 のもと、釜石市と大槌町の仮設住宅に緑のカーテ ンを設置した。居住空間の温度が下がる効果も あったが、それ以上に緑のカーテンを話題にして



撮影: 2012.6.23 岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置

隣近所と話すきっかけができた事は大きな成果で

あった。設置前まではせいぜい隣の人と話すくら いだったが、「きれいだね」「うちのはこんなに大 きくなったよ」と会話が生まれたようだ。 設置する仮設住宅団地を毎年増やしながら、震災 から3回目の設置となった。3年目の今年になっ て、仮設住宅に住む方々の気持ちに変化が生じて きているように感じる。仮設住宅団地のまとめ役 (自治会長・リーダー) によって、住民の意識に 差が出てきていると思われる。昨年までは仮設住 宅に住んでいる皆で協力して何かやろうという雰 囲気があった。しかし、この1年間でだんだんと 入居者に条件の違いが生まれてきた。ある程度資 金がある人、復興住宅の抽選に当たった人が出て 行く一方で、自分はいつ出られるのだろうと不安 を抱える人もいる。そうした条件の違いが心に隙 間を生み出し、仮設住宅団地での付き合いがうま くいかない方も出ている。あるいは仮設住宅周辺

100年後の曾孫の代を思って

と思われる。

の隣人からの支援や協力も少なくなってきている

今、復興に向けて事業が進められているが、その 基準は震災直前の状態に戻す事が優先されている。例えば、大槌町においては高度成長期の開発 によって、2つの河川の河口の位置を変えて防潮 堤が作られ、かつての干潟や砂浜・防砂林は消え てしまった。復興計画ではこれまで通りより高い 防潮堤を作り、ビオトープエリアも作る計画が示されている。しかし、ビオトープ復元も重要であるが、むしろ自然に戻し居住エリアをステップ バックさせてしっかり守るべきではないだろうか。今回の大震災により、防潮堤が壊され、地盤 も下がり、干潟が戻ってきている。こうした自然

企業

の働きは非常に貴重である。震災後、地元の方々が「子どもの頃の干潟や海が戻っただけ」と言っていたのは印象的であった。自然の現象(大津波)を人工的に防ぐ事に、限界があるだろう。実際に現地の被災した方々の意見を集約すれば、もちろん多くの意見はあるが、防潮堤は低い方がよいという意見が多い。危険は自分の目で察知しなければならない。高い防潮堤は住民を海から遮断し、危険を察知できなくなる。本来リスク察知の本能であるはずの五感が働かなくなっている。防災を考えるなら、「本能を活かせるようなまちづくり」をしなければならない。

現在、世の中では持続可能なエネルギーに関するしっかりとした理念がない。二酸化炭素の削減(化石燃料削減)も本気で取り組んでいない。今回の震災はそうした事に気づき、変わるチャンスなのだと思う。持続的なエネルギーのもとになる資源は無尽蔵にある。その資源をフルに活用する技術開発に、原子力発電開発同等の国家予算を投じれば、新しい産業が生まれる。これまでと同じ産業が持続する事はないかもしれない。今植えた木を最終伐期で伐採する時、社会はどうなっているだ



撮影:2012.6.23 岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置

ろうか。80年後、100年後の曾孫の時代、化石 燃料は底をつき、新たなエネルギーに移行して、 社会は大きく変わっているだろう。今、遅ればせ ながら、持続可能なエネルギー開発に真剣に取り 組むべき時にきている。



撮影: 2012.6.23 岩手県内の仮設住宅に緑のカーテンを設置(野澤 日出夫さん提供)



撮影:2013.7.7 岩手県陸前高田市 一本松(EPO東北スタッフ撮影)



撮影:2013.7.7 岩手県陸前高田市(EPO東北スタッフ撮影)



撮影:2013.7.7 岩手県陸前高田市(EPO東北スタッフ撮影)